

時代様式と演奏法ほか

中世からルネサンスへ

中世 西洋の大陸側：ユニゾン、オクターブ、完全5度、完全4度のみが協和音程
3度、6度は協和音程扱いされない

イギリス：3度、6度が協和扱い

やがて大陸側でも協和扱い→ルネサンス様式

相対的に完全4度は次第に不協和扱いされるようになった。

ルネサンスからバロックへ

中世、ルネサンス時代には「拍」はあったが、「拍子」はなかった。

ルネサンス時代以前のポリフォニー音楽の「場合、全声部を貫く統一的な拍はあったが、統一的な拍子はなかった。

ルネサンス時代以前のポリフォニー音楽の場合、旋律の入りが声部ごとに異なるために、歌詞に由来するアクセントの位置が声部ごとに食い違うのは当然であったし、同一声部の中でも歌詞の要請に従って、アクセント・パターンが刻々と変化するのは普通であった。

従って、こうした音楽では、全声部を貫く共通の時間的単位である「拍」は存在するが、すべての声部に共通したアクセント・パターン、すなわち「拍子」はまだ存在しなかった。

作品が拍子を持つ音楽が書かれるようになったのは、バロック時代以降であった。その萌芽は、民謡歌謡形式に基盤を持つルネサンス時代の合唱曲や、ルネサンス後期の器楽曲にしばしば採用された舞踏形式の音楽に求められる。舞踏音楽の場合、全声部に共通した一定のアクセント・パターン、すなわち拍子がないと、ステップが踏めない。そこで、舞踏音楽には必然的に拍子が伴う。

バロック音楽は、こうした舞踏音楽のスタイルを基礎的な語法とした。そこからバロック時代以降の西洋音楽は、拍子を持つようになった。

バロック音楽から古典派へ

バロック音楽の場合、楽曲構成の最小単位は、小節にではなく、拍におかれていた。

バロック時代の演奏は、正しい位置にアクセントをおいて演奏し、また聴取するこ

とが、音楽造形を正しく把握するために必要である。

古典・ロマン派の音楽の場合、音楽を構成している動機は拍に拘束されていない。様々なリズムを統合している共通単位は、拍ではなく、小節である。

時代様式と演奏法

バロック時代の音楽と古典派時代以降の音楽の演奏法との間にも違いがある。

バロック音楽の場合、音楽の造形を明確に表現するために打拍の位置を常に明らかにしておく必要がある。そのためにはアクセントのあるべき位置にアクセントをおいて演奏する必要がある。

ただし、その場合、アクセントは拍の位置を示せばよいのであるから、必ずしも強く演奏する必要はない。

まして音量の変化をもたらすことが困難な楽器の場合、アクセントのある音符を他の音符よりも強く弾く「強さのアクセント」ではなく、アクセントのある音符を他の音符よりいくぶん長めに弾く「長さのアクセント」によって打拍の位置を示す方法がしばしば採られた。

拍を構成している同じ音価を持つすべての音符を均等の長さで弾く必要はなかった。打拍の位置が明瞭になればよかった。

これに対して、古典・ロマン派の音楽の場合、個々の動機のリズムの相違を明確に造形するためには、その基礎にある音符の分割を均等に行う必要がある。同じ音価を持つ一連の音符のうち、ある音符だけがバロック風に他の音符よりも長く演奏されてしまうと、個々の動機のリズム形の微細な相違が曖昧になってしまう。

古典派・ロマン派の音楽の場合、楽曲は一定の拍子で書かれているが、打拍の数と位置は必ずしも一定ではない。打拍の位置が小節ごとに変化するのが心地よい浮動感をもたらす。

バロック音楽は基本的にすべての拍が打たれる構造をとっており、それがバロック音楽特有のダイナミズムをもたらしている。

古典派からロマン派へ

古典派とロマン派の音楽を明確に分ける特徴を見出すことは難しい。

① 超絶的技巧の開拓 ② 哲学や文芸から影響を受けた作品構想 ③ バロック時代

以降の機能 and 声の拡大とさらにはその崩壊 ④民族主義的傾向など
これらはロマン派中期以降顕著になる。

ソナタ形式で書かれた楽曲の構成について

古典派：その主題は旋律でなく、旋律断片ともいべき「動機」に基づいて構築した。

ロマン派：旋律を連結して構成した。

旋律性を主体にした穏やかな構成法をとっていることから、文学や哲学に取材した音楽外的なプログラムに基づく楽曲が可能となり、旋律中心の楽曲構成を行ったことから和声の拡大が生じ、民族色あふれる旋律を生かした作品が生まれた。

調性

後期バロック時代から後期ロマン派時代にかけての西洋音楽はおおむね長調か短調のどちらかの旋法で作曲されており、調性音楽と呼ぶ。

調性音楽は機能 and 声体系によって支えられていた。楽曲中に現れる和音は、単に何の音で構成されているか、という観点だけではなく、その和音は調の中でどのような機能を持っているか、その和音はその前後の文脈の中でどのような機能を果たしているか、という観点から分析される。

音楽の商業主義化

採算性の向上。

演奏会の大規模化

スター性をもった演奏家の登場（超絶技巧家の登場）

楽器の改変(改造)

大規模会場に適したという点で改良

堅牢化、音域の拡大、音量の増大、音の立ち上がりの速度向上、音の持続性の向上、高域から低域までの音のバランス向上 ⇒ タッチの変化（深く、重く）

弦の長さや張力の関係で、高域の音量音質が貧弱⇒中域は良く鳴った。低域が透明であった。⇒低域の旋律線が明確に描けた。

楽器の特徴を生かした曲づくりが行われた。